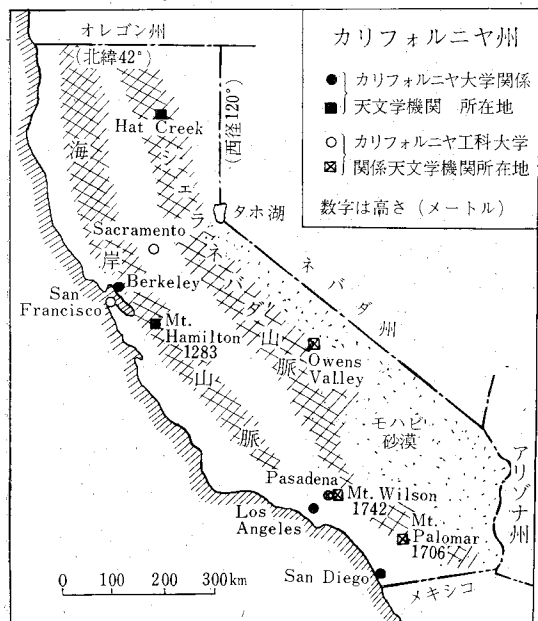


## ウィーバー教授のこと

高瀬文志郎\*



日本でならザラに見られる黒塗りの自動車は、アメリカ(の少くとも西部)ではごく数が少ない。またふだん着の洋服の色合いも、日本みたいにはダーク調が一般的ではないようである。

ところがカリフォルニア大学のウィーバー(Harold F. Weaver)先生は、黒い車を乗用し、洋服もいつも黒っぽいのを着ている。アメリカ人がよくやるように、机

の上へ脚をあげたりしているのは見たことがないし、外国から来ている人々をやたらに first name で呼んだりもしない。ざっくばらんな感じよりも、むしろ格調を重んじる方である。どうも、平均的なアメリカ人とは、少し趣味がちがうらしいのである。

私は1961年から約2年間、バークレー市のこの大学に滞在したが、その間、ホストの教授として、何かとよく面倒を見てもらったことを深く感謝している。

カリフォルニア大学は州立で、バークレー(本部がある)、ロスアンゼルス、サンフランシスコ、サンディエゴなど数カ所にキャンパスをもたずいぶん大世帯の大学である。これらのうち天文学教室のあるのはバークレーとロスアンゼルスだが、サンディエゴ市のラホイヤ(La Jolla)にあるキャンパスの物理学教室には、著名なパービッジ夫妻がいる。ほかに大学付属の天文機関としては、ハミルトン山にリック天文台、ハットクリークという村に電波天文台がある。またバークレーのキャンパス内にはロイシュナー天文台の古い建物があるが、これは学生演習用に使われることを除けばやや博物館的存在といった方がよいであろう。

これら各天文学機関は、カリフォルニア工科大学(Cali-tech.)の所属であるパサデナの研究所、ウィルソン山およびパロマー天文台、オーエンスバレーにある電波天文台とともに、世界的な天文学研究、観測の中心をなしていることは周知のことである。

さてウィーバー先生は、そのバークレー教室の三人の



ハットクリークのカリフォルニア大学電波天文学研究所観測所。左が33フィート、右が85フィートの赤道儀式パラボラアンテナ。

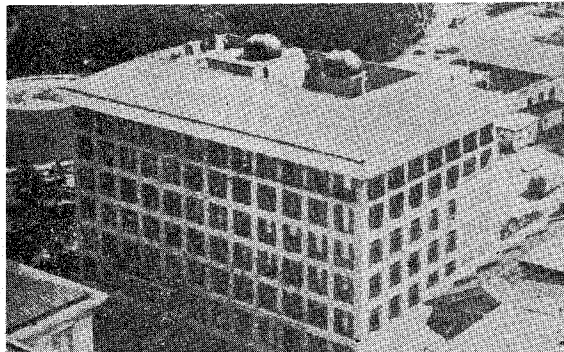
\* 東大理



URSI 総会で来日の折の  
ウィーバー夫妻

教授の一人であるとともに、電波天文学研究所（本部はパークレー、観測所はハットクリーク）の所長を兼ね、精力的な活動をつづけている。当年 47~8 才の働きざかりである。著書に *Statistical Astronomy*（統計天文学）があり、また *Handbuch der Physik* 54 巻には *Photographic Photometry* の一章を執筆している。論文にも、測光関係（おもに 1940 年代）と、恒星統計関係（1951 年以後）のものが多く、なお 1963 年にはプリンストン大学と協同のストラトスコープ II 計画（準大気圏外まで二段気球にのせた望遠鏡をあげて、折から接近中であった火星の精密観測をねらったもの）に参加して、一応の成果をあげた。最近では電波の方面の仕事にも鋭意取り組んでいるようである。

彼がやった恒星統計、運動学的方法による銀河系構造の研究のうち有名なものとして、1955 年の *Astronomical Journal* 誌上に発表されたオールト常数  $A$  についての議論が挙げられよう。当時  $A$  としては、一般に 20 (km/sec·kpc) ぐらいの値が考えられていたが、彼は B 型星やセフィイドなど、遠距離のものまで観測できる材料を解析して 11~13 という小さな値を提唱して注目をひいた。それまでにこれらの遠い星に対しても、オール



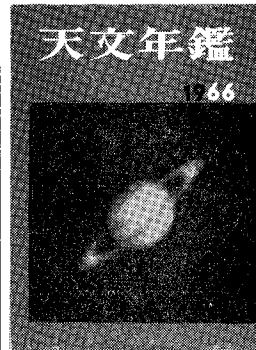
2つの5インチ望遠鏡ドームを屋上にもつ、キャンプ・ホール。この建物の5階の一部と6階以上に天文学教室と電波天文研究所がある。

トが最初にやったような、太陽のごく近傍の星だけに通用する近似法を踏襲していたのを彼がその近似をさける方法を導入し、材料も新しいものを使って出した結果である。もっとも彼の“補正”はややオーバーだったようで、現在の  $A$  の値は大体 15 ぐらいのところにおちついている。

1963 年オーストラリアのキャンベラで開催された IAU-URSI の銀河系とマゼラン雲のコロキウムでは、B 型星の分布と運動の解析結果、これらは銀河面上で kpc 程度の直径をもった部分ごとに別々な運動 (regional motion) をしていることを述べて、やはり注目をひいた。中性水素の観測から得られる 3 kpc 膨脹腕や、銀河回転速度の南北両半円でのちがいが、銀河系全体の膨脹運動で説明できないかという問題の一つのチェックを、ガスから星になったばかりの B 型星について試みたのだが、結果は膨脹の代りに地域別運動を考える方が尤もらしいと出たわけである。

× × ×

彼の著書 *Statistical Astronomy* は故トランプラー教授との共著で、1953 年に出版された。1962 年には Dover 版として再発行されたところを見ると、もう古典の扱いなのであろうか。もとの本はずいぶんあつくて重いのので、携行に不便だったが、Dover 版は手頃なサイズにな



1966年版  
大好評 発売中  
定価 220円

66年度の天体観測計画は、  
まず本書をご覧になってか  
らお立てください。

1年を通して、毎日の天文現象が一目でわかる便利な予報をはじめ、各惑星の動き、太陽・月の出没時、木星衛星の動き、太陽活動、彗星・流星の消息、長周期変光星の予報など各種データをくわしくのせると共に、今年度から新しく月面余経度・月面緯度も掲載しました。

誠文堂新光社 東京都千代田区神田錦町 1-5  
振替 東京・6294番



W. W. キャンベル



R. J. トランブラー

ったので具合がよい。

この本のとびらに、ウィリアム・W・キャンベルへの献辞があるが、恒星運動の研究の開拓者であるキャンベルは、やはりカリフォルニア大学の教授であった。またリック天文台の台長やこの大学の総長にも就任しており、なかなかの人物であつたらしい。キャンベル項、略してK項という、恒星運動の解析にいつも出てくる言葉は彼を記念したものであるが、パークレーのキャンパスには、やはり彼の名を冠したキャンベル・ホールという建物がある。地上六階、地下一階のしょうしゃなビルデ

ィングで、天文学教室も、電波天文学研究所も、このホールの一つの階を占めている。

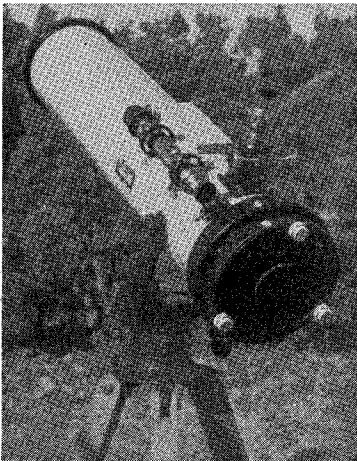
トランブラーもまたこの教授で、恒星天文学、とくに散開星団の研究で有名であった。彼の名もまたトランブラー星の名称に残されている。これらキャンベル (1862—1938) とトランブラー (1886—1956) のうち樹てた、カリフォルニア大学の恒星天文学の伝統をついでいるのがウィーバーなのである。

私はもちろん故トランブラー教授には会うべくもなかったが、何となく彼への親しみを感じた。というのは、ウィーバー夫人が同教授のお嬢さんなので彼女を通じて故教授の人柄にふれるような気がしたからであろう。ウィーバー夫人はじつによく出来た人で、私や私の家族にそそがれたそのあたたかい好意は、いまでも嬉しく思い出される。その父と夫の共著である *Statistical Astronomy* ができるとき、原稿をタイプで清書したのは夫人であったという話である。

私がウィーバー夫妻に *How do you do?* を言ったのは、サンフランシスコの空港に到着した8月はじめ、かの地特有の霧の朝である。早朝なのに揃って迎えにきて貰って恐縮した。霧の到着ゲートのところに立って、あなたは Takase ではないか、と聞いた黒い服の人が先生



## カンコー天体反射望遠鏡

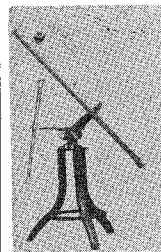


二十糎CG式焦点距離二段切換  
天体反射望遠鏡

- ★ 天体望遠鏡完成品各種
- ★ 高級自作用部品
- ★ 抛物面鏡、平面鏡、軸外し抛物面鏡
- ★ アルミニウム鍍金
- ★ 電源不要観光望遠鏡 (カタログ要 30 円切手)

## 関西光学研究所

京都市東山区山科竹鼻 TEL 京都 09 0057



15 cm 経緯台

### 厳密なる精度・安価な値段

ニュートン式抛物面鏡(斜鏡付き)  
8cm~30cm(アルミメッキ済み)

カセグレン式抛物鏡(補鏡付き)  
20cm~30cm(アルミメッキ済み)

接眼鏡(全面コーティング済み)  
オルソスコフィック5m/m, 9m/m  
その他ケルナー、ミッテンハイゲン各種。

### 屈折二枚合成アクロマチック対物レンズ (光軸修正

枠付き) 有効口径 (8cm 以下製作中止) 8cm,

9cm, 10cm, 11.5cm, 15cm, 各口径  $f=1:15 \sim 1:11$

接眼鏡: ラックピニオン二段式 40 m/m 接眼鏡兼用

架台: 全周ウォーム式。

上下微動: ネジに遊びのない独自の設計。

脚: 振動のないアルミニウム鋳物製。



カタログ 30 円切手  
(誌名記入)

### 完成反射望遠鏡各種

有限  
会社

## 足立光学レンズ製作所

東京都武蔵野市関前5丁目1,185

国鉄中央線武蔵境駅下車バス桜橋停留

TEL 武蔵野 0422 8614 番

振替口座 東京 41970 番

であることはすぐにわかった。というのも、想像していた感じと実物がそう違わなかったからである。その想像というのは、彼の著書や論文ならびに貰った手紙に書かれた文章の感じをもとに、私の脳裡に画いていたものであった。彼の文章には、たとえていえば、舞台の役者のせりふのような独得の調子がある。そういえば、物腰にも、会話や講演のときの発声などにも、舞台演技的なふしがよく感じられた。見聞きする相手のことを十分に意識してなされる彼の文章や講演は、したがって大変わかり易いのである。もっとも、こういう彼を、いわゆる“sophisticated”な人物と感じるむきもあるらしいのだが。

1963年9月、東京で開催された URSI の総合に来日して講演や討論をし、東大の天文学教室で依頼した講義も快よく引受けてくれた。その際に彼に接したり、その話をきいた方々の印象はどうだったであろうか。少なくとも彼の話がわかり易いという点では、あまり異論があるまいと思う。

URSI での来日といえば、その際、私はウィーバー夫妻の京都案内役を引受けた。あちこち廻った中で一番先生の気に入ったのは、洛西嵯峨野の散歩だったらしい。滞日中数回それを口にしたし、いつか貰った手紙にも、

又そのことが書いてあった。これは野宮の竹やぶ、落柿舎、去来塚、厭離庵、滝口寺、祇王寺など、いわば俳諧ムードと、諸行無常の平家物語ムードのコースである。簡素で明るい前者と、幽玄でかけ深い後者の心象風景が、鮮やかな黑白写真的映像として、彼の心を強くとらえたのにちがいない。

ここで黑白写真的映像などという言葉を出したのはじつは彼が写真美術に深い趣味を持っていることをふと思い出したからである。彼の家の客間には多くの写真家の作品集が置いてあったのを見だし、いつか私におくられたプレゼントは、著名な詩人写真家 C・ライトの、“Words of the Earth” というすぐれた作品集であった。それはカリフォルニア州の背景をなすシュラネバグ山地の風景を主題にしたもので、鉱物（山水や空気）と植物（おもに樹木と野草）の世界の光と影の諧調と形象が鮮鋭にとらえられている反面、人間や動物や花のたぐいは姿を見せず、色彩やボリューム感は思い切って捨象した——まさに色気とは無縁な黑白写真なのである。

あるいはこんなものが、ウィーバー先生の趣味や人柄を端的にあらわすポイントなのかもしれない。最初に書いた黒ぬりの車に黒い服という身の廻りも、これと無関係ではないのであろう。

西村製の

## 30 cm 反射望遠鏡

下記へ納入して好評を博しております

- 米 ゴッダード・スペース・フライト・センター  
ハインド J R短期大学  
ムレ大学
- 英 オックスフォード大学
- スイス バーゼル大学



30 cm 反射望遠鏡

ニュートン・カセグレン兼用

株式会社 西村製作所

京都市左京区吉田二本松町 27

電話 (77) 1570, (69) 9589

昭和40年9月20日

印刷発行

定価70円(送料6円)

地方売価75円

編集兼発行人

印刷所

発行所

東京都三鷹市東京天文台内

東京都港区西新橋1丁目21番8号

東京都三鷹市東京天文台内

電話武蔵野45局(0422-45)1959

広瀬秀雄

笠井出版印刷社

社団法人日本天文学会

振替口座東京13595